

ABS 秋田放送特別賞 / 消えるが消えない。変わるが、変わらない。



小出 倫太郎 Rintaro Koide (ビジュアルアーツ専攻)

現代の社会では合理性や利便性を優先するためにさまざまなものが不可視化されている。マジョリティとは区別される「他者」の存在や、生活の基盤を作る過酷な労働者の姿は、それが見えない時には意識されることはない。こうした問題意識から出発した本作は、自分だけが後ろ歩きをした動画の逆再生や、クロマキー撮影によって半透明化された状態での雪かきの様子などの映像とインスタレーションによって、不可視化された存在を浮かび上がらせる。ユーモラスなアイデアで、社会の暗部を鋭く突く秀作である。(村上由鶴)

AAB秋田朝日放送特別賞 / グータ



ブラネン新那サイデ Niina Saide Brannen (アーツ&ルーツ専攻)

ブラネンの「命を宿す身体」への探究は、ダンサーとして踊ることのみならず、作品制作においても一貫して展開されてきた。畜産農家から譲り受けた豚皮や、自ら採取した昆虫の死骸を素材として扱う際、彼女が重視するのは、それらが単なる素材ではなく、かつて生命を宿した身体の一部として「生の履歴」を内包している点である。彼女はその「生の履歴」を自身の「現在の生」と重ね合わせることで、自己の生を生きながら他者の生を慈しむことの意味を問いかける。ミクストメディアから成る本作は、行為の芸術やライフログ的なアプローチとも交差しており、その独創性と真摯な制作姿勢を高く評価する。(山川冬樹)

第12回 きらり!早瀬真理子奨励賞 / 介在

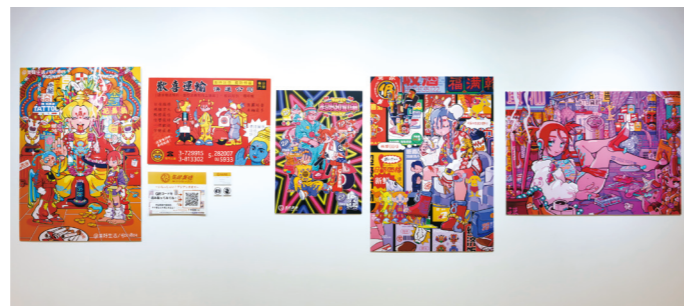


杉本 瑞月 Mizuki Sugimoto (ものづくりデザイン専攻)

本作は、ガラスを器や彫刻、インテリアとして捉える従来の枠組みから距離を取り、感覚に気づくための装置として再構成した、完成度の高い卒業制作である。中空のガラスに耳を寄せるといった行為を通して、鑑賞者は周囲の音や自身の呼吸、身体存在を自然と意識するようになる。作品は単に見る対象にとどまらず、人と素材との関係を静かに問いかけており、その落ち着いた佇まいと構想の深さは、既存の枠組みに回収されない広い可能性を感じさせる。(瀬沼健太郎)



AKT秋田テレビ特別賞 / 気候製造



大瀧 千尋 Chihiro Otaki (コミュニケーションデザイン専攻)

本作においては、現代的な倫理課題に対する深い洞察が圧倒的な描写と卓越した美的感覚によって具現化されている。作者は概念的な議論に留まらず、膨大な情報を統率する高い画力をもって、視覚的な説得力へと変換させている。自身の欲望と誠実に向き合い、美学的な完成度へと結実させたその力量は極めて高い。表現の自由と責任とは何かを示す好例である。(飯倉宏治)



CNA秋田ケーブルテレビ特別賞 / 28111回 私たちの身体は、常に伸び縮みしている



齋藤 操 So Saito (アーツ&ルーツ専攻)

木の伐採は、生物としてのそれを人間の領域へと引き入れる、言わば越境的な行為だ。そして、人類が最初に手にした道具である石を使って木を伐ることは、祝祭性とともに我々が忘れていた原初の感覚を呼び覚ます。手に伝わる振動と痺れ。同時に木の痛みも伝わる。本作は、映像から、そして木の荒々しい木の切断面から、それらがリアルに感じられるように丁寧にそしてダイナミックに構成されている。とは言え、鑑賞者によるその感じ方はやはり多種多様だ。重要なのは、そのイメージを共有すること。そして互いに語り合い、そこに生じるズレから新たな「物語」を見出すこと。作者はここに「解釈の共有地」を拓いた。(唐澤太輔)

令和7年度 秋田公立美術大学 卒業研究・大学院修了研究 受賞作品一覧

令和7年度秋田公立美術大学卒業研究・大学院修了研究において、卒業研究学長賞、複合芸術研究賞、学長奨励賞、きらり!早瀬真理子奨励賞、秋田県立美術館館長賞、卒業・修了研究作品展の後援企業等による特別賞を受賞したものを掲載しています。

令和7年度 秋田公立美術大学卒業研究・大学院修了研究 受賞作品一覧

学長賞 / Flow



小野 花心 Hanami Ono (ものづくりデザイン専攻)

作者自身が、これまでの経験と実感の中で感じてきた曲線の心地よさを求めて、ヒバの単板を積層し、全長 20m の帯状の木材を空間に展開した意欲作。従来の成形合板とは異なり、幾度となる実験の中から、重力と身体感覚を用いた即興的な曲げ加工という独自の方法を生み出した。身体的スケールを起点とする工芸的アプローチでありながら、厳密な素材との対話によって有機的な三次元曲線を生み出し、ダイナミックに空間を拡張させた点は極めて革新的である。これからのものづくりの概念を押し広げ、空間芸術に新たな可能性を提示する秀作である。(今中隆介)

複合芸術研究賞 / 現れる身体

——「ただある身体」が躍動するとき

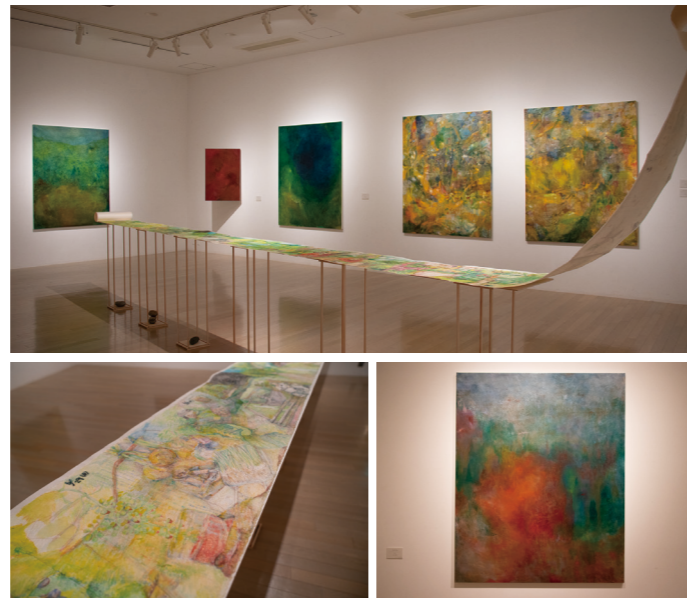


大村 香琳 Karin Omura (複合芸術研究科)

本研究は自身の膝の故障を契機として個人の身体性の喪失と現代社会における一般的な身体感覚の希薄化を自覚した筆者が、やがて自らの思索と調査、ダンスの実践を通じて「世界と結びつく力」「場に佇む感覚」「他者との関係性」を再構築する経緯を、オートエスノグラフィーによる身体芸術論として論じたものである。本論は太田省吾の身体論と西田幾多郎の場所論を領域横断的に接続し、さらに川崎市子ども夢パーク及びフリースペースえんでの参与観察を通じて身体の人類学的な探究を結実させた。独創的な複合芸術研究の萌芽として、本研究を高く評価する。(石倉敏明)

複合芸術研究賞 / 人と植物の関係性を絵画に描く

——白鷹町深山地区での滞在制作を通して



曾田 萌 Akari Soda (複合芸術研究科)

これまでパフォーマンスをはじめ、オルタナティブな表現を実践してきた曾田が志向していたのは、やはり絵画だった。彼女は絵画制作を自明なものとして、安易に鉛筆を取る前に、人と植物との関係性を手がかりとしながら、「絵画はいかに描かれ得るか」を自問しながら動き続けてきた。そして出会ったのが、山形県白鷹町深山地区と、そこに生きる人々である。その出会いから絵画を描くことの意味を再発見した曾田は、遠回りすることでしか獲得できない色彩を、支持体に定着させるに至った。フィールドワークの深度、成果物(作品)の質、そして制作報告書の充実度の三つが、高次で三立した研究として高く評価する。(山川冬樹)

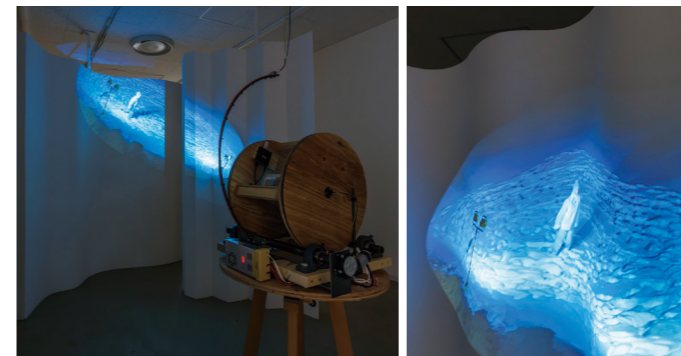
学長奨励賞 / 柱

高崎 結子 Yuiko Takasaki (ビジュアルアーツ専攻)

脊椎は個人差はあれど人種や性別にかかわらず共通して人体を支える機構である。作者は鉄の鋼材を用いた脊椎のモチーフによって属性を限定しない普遍的な人間存在の表現を試みてきた。本作《柱》は、脊椎が持つ身体を支える機能を強調するために、展示空間そのものを支える柱として提示している。ふだんは意識されにくい人体の機構に焦点を当て、その普遍性を示すことによって、他者を「同じ身体を持つ存在」として捉え直す契機となる。素材の強度とモチーフの構造が思想に結びついた秀作である。(村上由鶴)



秋田市長賞 / 南の極から



佐野 美奈未 Minami Sano (アーツ&ルーツ専攻)

秋田の雪を想起する有機的な白い造形の中、ぐるぐると月面を歩いているように回転する映像を浴びることで無重力のような身体的体験は創造的で、新たな装置を生み出した。作者は、香川で幼少期から鳴門の渦潮を見て月の引力や重力を体感し、秋田の自身を起点にしつつ、中心を持たない回転と言う独自の定義により他の場所との関係を繋ぎ「ぐるぐる」をテーマに徹底した研究を続け、循環や輪廻にもつながる根源的な問いと普遍的な表現として結実させた。(村山修二郎)

あきびネット賞 / 季節を折る



加藤 まりあ Maria Kato (コミュニケーションデザイン専攻)

幼少期から親しんできた折り紙を起点に、日本古来の礼儀作法である「折形」に着目し、その文化的背景や歴史的意義を丁寧に探究してきた。現代生活において折形が身近な存在ではなくなった理由を考察するとともに、文献調査と制作を通して、その意味や価値を再評価している。さらに、伝統を単に継承するのではなく、現代の日常生活に適應させた新たな使い方を提案する姿勢は、研究への主体性と創造性の高さを示しており、高く評価できる。(孔鎮烈)

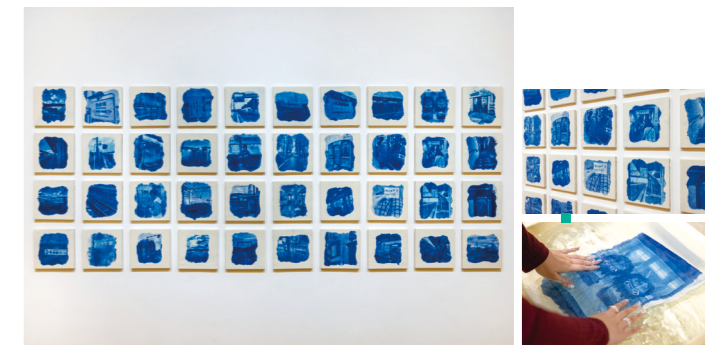
秋田県立美術館館長賞 / 秋美空間備忘録



秋本 玲奈 Reina Akimoto (景観デザイン専攻)

一見すると親しみやすく、鑑賞の楽しさを備えた作品である。しかし、その背後の意図は深い。本学の9つの制作室を細部まで丹念に描き出すことで、そこが絶えず更新される流動的な場であることを示している。それらの図像は大判で一枚ずつ提示されるとともに、部分を切り出して再構成した冊子へ展開される。そして、両者の往還が流動性を強め、多層的な鑑賞体験を導く。本作は単なる空間の記録にとどまらず、「備忘録」から立ち上がる身体的な経験を喚起する優れた空間デザインである。(井上宗則)

秋田魁新報社特別賞 / 記憶のあいまに



池端 咲紀 Saki Ikehata (コミュニケーションデザイン専攻)

作者は在学中の海外留学を契機に、故郷秋田に刻まれた時間と記憶を見つめ直した。サイアノタイプ(青写真)で布に露光液を塗布する際に生じる滲みの輪郭を「記憶のフレーム」と捉え、通学路の風景を定着させた。秋田の水と太陽によって適度に抽象化された写真は、鑑賞者の記憶へ静かに浸透イメージの対話を喚起する。素材の物質性や技法を展示に至るまで精密に検証を重ねた本作は、SNS等で瞬時に消費される現代の写真と対照をなす。「見る」ことの自由さと豊かさを示す意欲作である。(草薨裕)